

## 伝説を今に伝える

～鳴かずの池、金谷の一本松、女沼男沼、徳利坂～

### 鳴かずの池(弁天沼)

岩殿地区の正法寺参道の手前に、出島のある広い農用のため池があります。通称「鳴かずの池」と呼ばれるその由来は？昔、坂上田村麻呂が蝦夷征伐の途中この地に立ち寄り、里人の頼みで岩殿山に棲む悪竜を退治しました。その竜の首を埋めた場所に後年、寺の住職が弁財天を祀り、里人のために農業用のため池を掘りました。

弁天沼と呼ばれていたこの池には、不思議なことに蛙(カエル)が棲みつかず、初夏の頃のうるさいほどの大合唱もなく、静かなところから、人々はいっしょに「鳴かずの池」と呼ぶようになったと言っています。今でも蛙の鳴き声は少なく、休日など太公望が竿を並べています。



### 金谷の一本松



金谷の里の名主に、綾という美しい娘がいました。綾が十六の時、母が病で亡くなり、悲しんだ綾は毎日下青島村の浄光寺の母の墓に詣っていました。寺には、左膳という美少年の寺小姓がいて、綾の墓参りの手伝いをしていて、二人は恋仲に。綾の父は心配して、綾の墓参を禁止しました。嘆き悲しむ綾を見かねた綾の乳母は、月に一度満月の夜、金谷の一本松の下で二人を逢わせました。これを知った寺の住職は、身分違いの恋を諦めよと左膳を京の都へ修行に出しました。綾は気も狂わんばかりに驚き、父に自分も京行きを哀願。拒んだ父も娘心に折れ許しました。綾と乳母は巡礼姿となり、左膳の後を慕って旅立ちました。歳月は流れ、綾の父の髪は真っ白になったが、綾も乳母も左膳も金谷の里には帰ってきません。金谷の松の木だけが、変わらぬ緑の枝を広げています。

### 女沼男沼

松山城下新田の下沼のあたりに与四郎という町人が、母と新妻と三人で住んでいました。時は戦国時代、松山城主上田朝直は、主君の小田原城主北条氏政の武田との戦に加勢する事となり兵を集め、その中に与四郎も駆り出されたのです。

北条―武田の戦闘はすさまじく、手傷を負った、気の弱い与四郎は夜戦にまぎれ、戦場から逃げ出しました。飢えと疲れでヘトヘトになりようやく松山へ帰った与四郎は、我が家へ着いたが、誰もいない。ふと仏壇を見ると、真新しい位牌が二つ。驚いて近くの叔父の所へ行くと、小田原から知らせが入り、与四郎は戦死したが死骸すら判らないと。それを聞いた母は悲しみの余り死に、残された新妻も世の無情をはかなみ近くの下沼へ身投げしたとのこと。二人の位牌を胸に他国へ逃亡を計った与四郎は、上沼の辺りに来た時、天涯孤独の身を嘆き、上沼へと身を投げてしまいました。いっしょに下沼を女沼、上沼を男沼と呼ぶようになったということです。



上沼(写真:上)と下沼(写真:下)

### 徳利坂



下岡の光福寺の傍らに、ゆるやかな坂があり、両側に大木や草木がうつそうと茂る、昼でも薄暗い寂しい所でした。

下岡のある人が松山の町へ買物に行き、帰りに酒を飲み、夜遅くに人気もないこの坂に差しかかると、後ろからゴロンゴロンと転がり落ちてくるものがあります。

闇の中、目を凝らして見てみると、何と四斗樽ほどもある大きな徳利でした。その人はビックリして何もかも放り出し、夢中で坂を駆け降り、我が家へ逃げ帰りました。それ以来、この坂を徳利坂と呼ぶようになったということです。

Quest for Future

# 未来探究

豊かな自然に恵まれ、農業・工業・商業のバランスのとれた産業を持ち、比企地方の政治・経済・文化の中心都市である東松山市の未来は、輝かしい可能性を秘めています。

時代の変革の波と巧に融合しながら、東松山市に住む若男女全ての人々が心から充足した暮らしを実現できるよう、市民全員が力を合わせ、明るい将来に向けて、みんなで頑張っています。